

## From Writing Ethnography to Doing Ethnography Conference at Osaka Univ.

志水宏吉 1998教育研究におけるエスノグラフィーの可能性. 志水宏吉編 1998. 教育のエスノグラフィー. (嵯峨野書院) Pp2 ~ Pp28

rep.MATSUKAWA,Hideya  
Graduate School of Human Sciences, Osaka University

### 1.教育研究の展開

- ・教育病理の深刻化
- ・教育の私事化（プライバタイゼーション）による学校教育の権威の低下
- ・これらを受けた、教育改革の試み

などによって教育に対する関心は高まり、教育研究にも新たな視点や方法が望まれている。

これまでの教育研究者の議論の変遷

60年代まで・・・行動主義心理学と技術学の用語。「目標」「プログラム」「開発」  
70～80年代・・・社会学や政治学の用語。「権力」「アイデンティティー」「抵抗」  
近年・・・語り of 言語。「テキスト」「文脈」「身体」

- ・「カリキュラム実践の教育学を、文化的実践の政治学として研究する」（佐藤1997）
- ・「文化的実践への参加としての学習」（佐伯1995）
- ・発達心理学の問題を「共同性の問題」「意味の問題」「希望の問題」に整理（浜田1995）
- ・不登校を教師や、学校システムとの関係で見る（近藤1994）

社会学的視点の導入

教育社会学の中で構造機能主義に対して出た諸理論の一つ「エスノグラフィー」

### 2.エスノグラフィーとは

3つの意味（佐藤）

- (1)「民族誌」
- (2)「民族誌的アプローチ」
- (3)「民族誌学」  
(1)(2)を重ねた意味で使われる

- ・フィールドワークを用いた調査研究（見る段階）
- ・その成果としてまとめられた文章（書く段階）by箕浦

a.「対象」

- 「社会全体」・・・マクロエスノグラフィー（文化人類学）
- 「特定の場や小集団」・ミクロエスノグラフィー（社会学、教育学）

b.「方法」

「参与観察」（participnat observation）を中心にあらゆる機会においてあらゆる方法を用いてデータを収集する。

参与・・・内部の行為  
観察・・・外部の行為（関本 1988 Pp272）

「対象を自らと区別しながら中に入り込むパラドックス」

### c. 「性質」

エスノグラフィーとは

「科学レポートと、エスノエッセイの二側面を持ちその間に緊張関係があるもの」  
「文学と科学の2ジャンルにまたがる性格を持つ文書」（佐藤）  
「科学的な方法に守られた個人的体験の学」（関本）

個別具体的な「自己」と普遍抽象的な「世界」をつなぐ作業

## 3. 3つのエスノグラフィー

- (1) 「科学のエスノグラフィー」
- (2) 「職人的エスノグラフィー」
- (3) 「実験的エスノグラフィー」

### a. 科学のエスノグラフィー

言明や知見の客観性を何より重視し、実証主義的社会科学の土俵で勝負する志向を持ったエスノグラフィー。

(例) The Discovery of Grounded Theory(グレイザー、ストラウス 1967)

「論理的サンプリング」「カテゴリーとその諸特性」、「絶えざる比較法」、「理論的飽和」といった「量的方法」の構成要素と異なった概念装置を提示した。

「データ対話型理論」(grounded Theory) 「誇大理論」(grand theory)  
・網羅的なフィールドノーツの作成（「思いこみ」の回避）  
・研究グループ内でのフィールドノーツの共有（信頼性と妥当性の向上）

などの努力が必要。こうして「データの中に潜む構造を抽出」する。

### b. 職人的エスノグラフィー

特定の文化の全体像を洞察に満ちた叙述によって提示しようという指向性を持つもの。人類学や社会学におけるエスノグラフィック研究の多くが該当

・優れた研究者のエスノグラフィーが持つ説得力 「想像力」によって描かれる「全体」  
『日本の高校』（1983ローレン）、『ハマータウンの野郎ども』（1977ウイリス）など

### c. 実験的エスノグラフィー

80年代以降の文化人類学内部での自己改革を受けた誕生した様々な実験的試みを指すマーカスの言葉。

「文化の多様性を描き出すこと」という人類学の営みに見られてきた調査者と被調査者に非対称な関係。

調査者と被調査者の両面から描く「多声法的エスノグラフィー」

d. 「批判的エスノグラフィー」

#### 4. エスノグラフィーをめぐる論争点

a. 科学的研究との関係

データから得られるイメージと社会理論から得られる分析枠組みを絶えずつきあわせる。想像力に近い!?  
大部分のエスノグラフィ - はこの図式に位置づく。

・ハマスリーによると、「質的研究」と「量的研究」は対立関係ではなく事例数と情報量のトレードオフの関係。

・（実験的エスノグラフィーでは）クリフォードは6つの制約から、エスノグラフィーは「部分的真実」を与えるにすぎず、「フィクション」だと述べる。  
「データの質」 < 「データを算出する著者の主体性」

エスノグラフィーが持つ科学的方法に対するアンビバレントな志向性

b. 研究対象との関係

リフレキシビティー（reflexivity）・・・「研究者が研究対象社会の一部であること」

・人類学の歴史の中では、リフレキシビティーが見落とされてきたこともあった。  
・社会学の分野では、調査者、被調査者間の研究倫理が検討され規定されている（英米）。  
・教育学では表だった問題はないが、現場との関わり方、教師・生徒のプライバシー、研究成果の返し方、さらに「筆が鈍る」など難しい点もある。

c. 研究の価値

「科学のエスノグラフィー」においては、既存理論の修正、新理論創出など「理論的發展」  
「職人的エスノグラフィー」においては、「文化の多様性の把握」「異文化理解」  
「実験的エスノグラフィー」においては、「文化批判の力」をどれだけ持っているか

に価値が置かれる。

「妥当性」・・・ある言説が記述・説明・理論化しようとしている現象の特徴を正確に言い表しているか

「適切性」・・・その研究が、何にとって誰にとって適切か（ハマスリー）

「科学的e」

妥  
当  
性

「職人的e」

「実験的e」

適切性

エスノグラフィーの神髄は、フィールドの中の人との関わり合いの中で、カテゴリーを作り、研究者、被調査者の双方に意味のあるテキストを産出すること。